

第45回「てのひら文庫賞」岐阜県読書感想文コンクール

今井鑑三賞作品

6年自由図書部門／読んだ本・犬たちをおくる日

今井鑑三賞

「大切な命」

穂積市立生津小学校 牛島巧人

ぼくがこの本の読書感想文を書いたのは、多くの人に大切な命をすくうためにできることを知ってほしいと思ったからです。

ぼくは動物の本が大好きなのにどうしてもこの「犬たちをおくる日」は一気に読むことができませんでした。何度もズトンと気持ちが悪くなったけれど、殺される犬の数をへらすにはどうしたらよいのか、本を読めばわかるかもしれないと思って長い時間をかけて読みました。

一年間に処分される犬の数は約四千頭。「世話ができない」「飽きた」という飼い主の勝手な理由で、動物愛護センターに犬と猫が次々と持ちこまれます。一番ショックだったのは、飼い主と犬の気持ちが正反対のところにあることです。例えば、愛護センターに犬を持ちこんだ後、しばらくしてから、まだ生きていますかと問い合わせてきたら、飼いたい主がいきました。犬がいなくなつてさみしくなり引き取りに来るのかと思つたら、記念さつえいに來ただけで写真をとるとそのまま犬をおいて帰りました。いぬは飼いたい主が來たと思つて大よろこびでしつぽをふります。飼いたい主が犬をお金で買えるモノのようにあつかい、犬はいつまでも飼いたい主を待っているというあまりにもひどい光景にぼくは気分が悪くなつて目を閉じました。命を何だと思つているの！と怒りがこみ上げ、体

が熱くなりました。

ぼくはアパートに住んでいるので犬は飼えません。だからおじいちゃんの家にいる犬のノアが大好きでした。ノアが新だ後、おじいちゃんは犬を飼っていないので、どうして飼わないのかを聞いてみたら、

「今らか犬を飼うとね、十年以上生きるでしょ。じいじの方が先に死にそうだから。」

と笑いながら答えてくれました。ぼくは時が止まったかのように胸がしめつけられました。おじいちゃんは犬の最後まで飼つてあげないといけないとわかつていて新しい次の犬を飼わないようにしていました。それがすごいなと思つたと同時に、おじいちゃんが死んでしまうことがあるのだとすごく怖くなりました。ノアも家族のように一緒に生活していました。だからノアが死んでしまったとき、おじいちゃんはとても辛かつただろうと思います。そしてぼくにとって大切なおじいちゃんが死んでしまうことがあると考えたら、どちらも家族の一つの命であり、犬をモノのようにあつかうなんてとてもできないと思いました。

ぼくはこの本を読み始めたころは、殺される犬の数をへらすにはどうしたらよいだろうと考えていました。でも読み進めてわかつたことは、殺処分される犬をどうしたらすくえるのかではなく、どうしたらセンターに連れ

てこれないですむのかが大事なことでとど気づきました。

一頭でも多くの命をまもるために、ぼくにできることを考えました。動物をかつている友達にも、かつていない友達にも、最後まで家族として動物とくらししていくことが一番良いことと伝え、人間も犬も猫もみんな命は同じだと話したいです。飼いたくなつた時、例えば犬が食べるドッグフードにどのくらいお金がかかるのか、犬を毎日散歩に連れていってあげるのかなど、飼つてからのことを総合してほしいです。そして何よりも両親や兄弟の命と同じだと思つて大切に最後まで育てられるのかを考えてほしいです。その覚悟が出來たとき、ぼくも「飼いたい。」と言いたいと思います。岐阜にも、センターに持ちこまれた犬や猫の飼いたい主をさがす譲渡会という場があります。飼いたいと決めたとき、譲渡会のことを知っていると、犬や猫の命をすくうことができます。

ぼくたちが飼う犬や猫の命だから、人が守るべきだと思います。そして自分以外の人や動物を想う気持ちを持ち続けたいです。大切な命が一つでも多くすくわれますように。